

## 議 事 録

- 1 会 議 の 名 称 令和3年度第1回総合教育会議
- 2 開 催 日 時 令和3年10月13日(水)  
午前9時00分から10時00分まで
- 3 開 催 場 所 熊取町役場北館3階大会議室
- 4 議 題 案件1 今後のESD(持続可能な開発のための教育)について
- 5 公開・非公開の別 公開
- 6 傍 聴 者 数 0人
- 7 審議会等の概要 次のとおり

### ○ 会議開催の主旨説明

(町長)

・「熊取町教育大綱」を今年の3月に改定し、熊取町がめざすこれからの教育について、SDGsの達成など、教育を取り巻く環境が大きく変化する中であって、令和3年度より「新学習指導要領」が全面適用されている。「主体的、対話的で深い学び」の視点に立った授業を通して資質・能力を身につけ、生涯にわたって積極的に学び続けることを目標とすることや、環境や人権・開発などの課題を主体的に考え、公正で持続可能な社会をつくるために行動する人を育成する持続可能な開発のための教育“ESD”が重視されている。社会の加速度的な変化の中、まさに「生きる力」が求められている。この中で、「生きる力」とは、その都度の判断ができる資質・思考能力を保持するという意味ではないかと考えている。熊取町がこれからめざす教育の水準については、近隣自治体からも一定の評価がされているが、より高い教育をめざすために、この“ESD”をこれから町立小中学校でどのように進めていくのかということ、皆様にご議論いただきたいと思うので、よろしくお願ひしたい。

### ○ 町立学校におけるESDの取組状況の紹介

(教育長)

・「熊取町教育大綱」や「熊取町教育方針」に基づいて、各校の特徴や実情に基づいたSDGs・ESDの取組を着実に行っている。事例について、3点の切り口からご紹介する。

- ・ 1点目として、入り口となる SDGs や ESD を考え知る機会については、「学校だより」や「児童朝会」で紹介している。また、「副教材」として「NHK for School」で「SDGsを学ぼう」の活用や「生ゴミ処理機」を設置することにより、食べ残しなど身近なことについて自分にできることを考えるという意識付けの機会となっている。
- ・ 2点目は、学校づくりの観点。学校行事を ESD の視点で捉え直して、指導の工夫や授業改善につなげるよう、学校の先生方で会議をするなど取り組んでいただいている。また、できないではなく、どうしたらできるかの方法をみんなで話し合っている。みんなでつながりながら、ひとつの作品を作り上げるというような学校の校風や文化をつくっているところ。また、みんなの頑張りを見える化するために、学習の成果物を掲示している。掲示することによって、作品をつくるまでに協力を得た児童・生徒間、教師、ボランティア、地域の方とのよい人間関係を生み出していくような学校づくりをしている。
- ・ 3点目として、授業づくりがある。どんな授業をしていくのかということについては、問題解決型、教科横断的に主体的対話的で深い学びを進めていくという、学習指導要領にも記載のとおり進めている状況。具体的には、教えてもらうのではなく、自分たちでどうしていくかを考えて、自分の考えを伝えていく力が徐々につき始めていると現場から報告がある。また、授業のはじめに到達目標ゴールのイメージを話し、子どもたちが授業の最後に自ら振り返りをするすることで、学びの成果を実感するとともに、教員も授業改善につなげていくといった取組が進んでいる。また、図書館を活用した調べ学習については、例えば日本の貿易について調べて話し合うときに、社会と国語だけでなく、グラフや統計といった算数や歴史的な展開も加わるなど、学びの幅が広がることで、図書館での書籍に加えて、一人一台のパソコンを活用するといった ICT の活用も進んでいる状況。
- ・ 今年度は、ESD の取組の入口と考えており、令和4年度はより一層 ESD の視点に立った取組を強化し進めていく時期にあると認識している。現在の各校の取組を発射台にして深化・拡充させていくことになると考える。
- ・ 学校の先生に考えてもらうだけではなく、教育委員会としても提案が必要と考えている。ESD を進めるためには、出口をイメージできるよう中長期的なロードマップや取組事例を現場の先生に示した方がよいかと考えている。
- ・ 文部科学省・日本ユネスコ国内委員会の「ESD 推進の手引き」の中で、より効率的・効果的な推進手段として「ESDの活動支援センター」、「ユネスコスクール」、「ユネスコスクールの支援大学間ネットワーク」等の活用が効果的とあるので、そうした手法も検討していきたい。
- ・ ESD を推進していくには、先生が児童生徒に向き合う時間を確保する仕組みづくりが必要。ESD の推進と先生の働き方改革を車の両輪として進めていく。
- ・ 最後に、ESDの本質は、身近なところから開始し、学びを実生活や社会の変容へとつなげるということと示されているので、学校の活動だけではなく、家に持ち帰って保護者や家庭、家庭から地域につながっていくような取組が大事と考えており、今後の推進において先の3点が課題になってくると感じたので意見として述べさせていただいた。

○ 意見交換

(町長)

- ・先生の働き方改革については、行政としてできる限り負担を少なくするために、色々な環境整備を図るつもり。校務支援システムなどを採用して、先生が児童生徒に向き合う時間の確保や仕事を家庭に持ち帰らないようにする。ファシリテーターという先生の役割を手助けできればと考えている。

(梶山委員)

- ・学校ではそれぞれ工夫をして、既に取組を始められていることを認識した。これまでの取組プラス何が必要かを考えることが重要かと思う。
- ・E S Dの子どもたちへの浸透度をはかる尺度について、取組が教育として効果を生んでいるかどうか、例えば主体性の成果指標は難しく点数化できるものばかりではないが、評価がわからなければどこまでやればいいのか、あるいは方向性が正しいのかが判断できず、何となくやっています、で終わるようなことになりかねないので、アンケート形式でどれだけ浸透したかなど見える化できないかと考える。先のお話にあったロードマップなどにより先を見据えてやるべき。

(町長)

- ・検証も必要だということですね。

(梶山委員)

- ・できればわかりやすい客観的な指標があればと考える。

(町長)

- ・私が子どもの頃の授業といえば、先生が黒板に書いたものを書き写す一方的なものであった。現在は、先生の資料提供は端末でできるはずなので、先生と児童生徒がコミュニケーションを図りながら理解を深めていくということが、私が思い浮かべる授業内容であり、そのコミュニケーションの時間をE S Dの進捗度を測る指標にしてはどうかと考える。

(梶山委員)

- ・おっしゃるとおりで、うまくやれば、主体性ととも成績も向上させることができる。指標が必要といったが、例えば“協力型の授業が何パーセントあるにもかかわらず進学率が上がった”ということを示せば納得してもらえる。片方だけ独立させて先に進んでしまうとバランスを崩してしまう可能性がある。

(土屋委員)

- ・非常によいテーマを設定していただいた。また、学校現場の状況も教えていただき発想が広がる。
- ・E S Dの取組については、各校で既に発射台ができていて、このあとどうするかという状況と認識。E S Dの取組は私たちの年代でも解決できなかったことや解答がないことであり、教員も子どもたちと対等に話をしなければならないという前提が、主体的・対話的な深い学びを促す大きな要因であると考えている。対話をするときに、様々な立場や価値観を越えて深め合えることがE S Dの取組のいいところ。発射台として既にあるものをうまく使って、それにこのE S Dの前提である多様な価値観を認めるということが加わるだけ

でも、加速するのではないかと思う。

(町長)

- ・今までの熊取町の教育の良さは、自他共に認めるところ。それを保持しながら、幅の広いもの見方や考え方を増やしていくことが、ESDのひとつの役割だと考えている。
- ・熊取町には立派な図書館があり、加えてICTにより自由自在に資料を取り出すことができるので、そうした勉強の仕方や考え方を熊取町の教育の一つの方針にするのもありではないかと思う。学校内のみで進めるのではなく、保護者も巻き込んで進め、子どものコミュニケーション能力の向上につながっていくものとする。

(一ノ瀬委員)

- ・熊取南中学校の公開授業をみた。先ほど言われたように、確かに私たちの時代と違って、先生がタブレット端末で興味のある画像や動画を使いながら、また、生徒同士でわからないことについて話し合いをしながら、工夫のある授業をされていた。
- ・タブレット端末は自宅に持って帰ってきたが、つながるかどうかの確認だけであり、学校でどのように使っているのかやどこまで何ができるのかがわからなかったので、授業参観は良い取組の情報発信のひとつとして実施し、可能であれば地域の人も参加できる形で実施するとよいと考える。

(鈴木委員)

- ・日々の生活の中に根付いている一つひとつのことがESDにつながっている。
- ・ESDは大きな目標であり、具体的な取組としてユネスコスクールの参画を考えてもよいが、教員の負担をこれ以上増やすことに懸念がある。例えば、ESDカレンダーの活用などできることからやって達成感を得ることもよい。

(町長)

- ・ユネスコスクールへの参画はどうか。

(教育長)

- ・色々な教育プログラム、教材や手法を探っている。中でも、ユネスコスクールはネットワークの大きさ、加盟校の交流等メリットが大きい。文部科学省においてもESDを進める拠点にユネスコスクールを置いて進めるという方針がある。ESDを進めるにあたり、この枠組は有効であるとする。
- ・先ほど話題となった成果の手法について、既にご紹介した自分たちで調べて自分たちで発表するという取組を通じて、言語力や読解力という学びの基礎的な力がついてきているという声も出てきている。

(町長)

- ・なかなか点数で判断することは難しいことかと思う。時間が経つにつれて、熊取町の児童生徒の行動や思考パターンが結果的に変わっていくということになると考える。
- ・先生が変わり、子どもが変わり、相互作用で両者が変わっていくということで、子どもたちの能力を少しでも伸ばせたらと考える。
- ・一方的ではなく、ファシリテーターという言葉があるように、先生が生徒を理解していくことも教育が高まるには要素として大いにあると考える。

- ・ユネスコスクールについては、その標題を掲げながら、子どもたちの変化や先生の変化を求めていくことに、大いにありかと考える。

(鈴木委員)

- ・ユネスコスクールは、幼稚園から大学まで縦のつながりができる。また、自然に地域のつながりも上手くもてる。その中でみんなが平等に意見を述べられるというところに関心がある。先生の負担軽減の視点から、事例を取り入れる試験期間をもって参画できるように進めていくのもひとつの方法。今後は、勉強だけではなくコミュニケーション能力が社会を生きていくうえで一番大切だと思う。

(町長)

- ・先生の研修について、熊取町は大阪府が指導しながら行っているが、政令市になると自ら研修内容も含めて指導できる。大阪府の指導を受けつつも、独自の考え方を入れた研修をする中で、ユネスコスクールに対する取組に関するものも取り入れることはできないか。

(教育委員会事務局)

- ・年1回ではあるが、夏休みに先生方を全員集めて実施する講演会などにおいて、先生が身につけるべき力や知るべき情報について、町として何を進めていきたいかや各学校の課題をどう捉えていくかなどの考え方も独自に伝えている。

(町長)

- ・「熊取町教育大綱」で方針を示した以上、先生の児童生徒への接し方や勉強いただきたい内容など、町独自の研修があってもよいと考えるが、可能か。

(教育委員会事務局)

- ・町独自の課題は、大阪府の課題と重複する部分もある。大阪府の方針も踏まえながら研修に取り組んでいるので、何ら問題ないと考える。

(教育長)

- ・大阪府で実施している研修は、初任者、10年目、免許更新時などの法定研修やテーマ毎の研修となっている。一方で、各学校ごとに特色や状況があるように、市町村も取組方針などに色がある。独自の研修によりその色が見えやすくなる。
- ・ユネスコスクールは、活動範囲が非常に広く、世界の加盟校が1万1千校ぐらいであり、その1割の1千校ぐらいが日本の学校となっている。国際交流については、加盟校の間ですぐにでも取り組めるらしく、行政区域を越えて交流ができることから、行政的な視点から縛りかけかけるのではなく、学校や先生の主体的な取組を尊重し、サポートする視点で、うまく方向性を示していきたいと考えている。

(町長)

- ・行政区域を越えての取組に何か課題や問題が出てくるということか。

(教育長)

- ・課題があるということではなく、推進するべきと考えている。

(梶山委員)

- ・ユネスコスクールに取り組む場合の負担はどうか。名前だけのところからしっかり取り組んでいるところまで様々のようだが、負担を強いられるものであれば学校の事情や状況などに

よっては取組が難しい場合があるのではと懸念する。

- ・ユネスコスクールの活動自体は、年代を越えた縦のつながりがあり、国を越えて取り組めるところは素晴らしい。国際交流については、向こうの先生方とも交流するので、もしかすると先生に恥ずかしさがあるかもしれないが、私たち大人もわからないところから始めているということをベースに考えて、例えば翻訳アプリなど先生も一から取り組み、その意識改革から始めていくのであれば、非常に素晴らしい取組だと感じる。成果からはじまると難しいのではないかと。

(土屋委員)

- ・前出のE S Dの取組に係る評価の件、「全国学習状況調査」というものがあるが、例えばユネスコスクールの取組などを取り入れた場合に、学習状況以外の項目である生活満足度や意欲が上がり、だんだんと学力に波及していくような仮説はあり得る。通常思いつくものではあるが、今あるものを上手く使うことも考えられる。文部科学省も考えているかと思うが、他にもどんなもので評価しているか調べてみてはどうか。
- ・前出の教員への町独自研修の件、研修のあり方として、研修がトップダウンではいけない。主体的に深い学びにつながるような良い研修であれば教員が負担に感じず、むしろありがたいと感じるのではないかと思うので、そうした一方的でない研修をされたい。

(町長)

- ・私は「熊取町教育大綱」も含め、E S D教育を提案したひとりだが、このE S Dを進めるに当たっては、現場の先生はもとより、教育委員の皆様の協力が必要であり、その進め方については、指導でなく、お互いの理解を深めながら行うことが求められると思う。その中で、保護者、地域の人などが連携を図りながら質の高い教育を求めていくことにつながると思う。
- ・E S Dの進め方や研修の仕方などご意見をいただき、本日の会議は大きな成果があったと思う。
- ・教育のまちにあって、熊取町はその水準が高いが、能力を発揮しにくい子どもも中にはいるかもしれないので、そうした子どももすべて取り残さないというSDGsの考え方が反映できると考えている。それぞれの能力が発揮されるよう、先生の支援や環境整備を進めていきたい。また、情報発信も大切。町全体、住民の皆さんが熊取町の教育の中身を理解してくれているのがひとつの理想の姿と考える。行政としても全面的に応援しながら進めたいと考えている。ユネスコスクールも中身を確認しながらスピーディーに進める方向のお話があったので、よろしくお願ひしたい。

(教育長)

- ・E S Dを進めるにあたって、町長及び各委員のご意見も踏まえると、その手法としてユネスコスクール活用の方向ですすめたい。活用するしないを含めて現場の先生方がその気になって動かなければならない中で、良いものについてはどんどん紹介していき、押しつけではない形で取り組んでいただきたいと考える。ひいては、先生の自己研鑽にもつながる。一方で、先生は子どものために負担を厭わず取り組みがちであり、労務管理・安全衛生など留意しなければならない点もあるが、熊取町の教育をどうしていくかという点については、熊取町や各学校が進める教育の内容が住民に伝わるような取組を行い、教育委員会としてしっかりとまとめていきたい。については、予算面でのご配慮もお願いしたい。

